

常光徹

冒頭で著者が述べているように、現代と民話という言葉からは、一見、水と油のようにそぐわない印象をうける。そこには、長い歳月をかけて織り上げられ、語り伝えられてきた話こそが民話だという意識がどこかに宿っているためであろう。確かに時のふるいにかけてられて結晶した話は、それ自体のうちに光彩を放つものが多い。ただし、しかし、そうした伝統的な話のみに傾斜した関心の在り方は、ややもすれば、今、私たちが生きて生活している現代という場、そこでの話の姿を見失ってしまう危険を伴っている。

民話はいつの世にもすぐれて現代的であった。古くからの語りが伝えられるとともに、絶えず新たな話が生まれ、その間に話の変容・変化をひきおこし、あるものは消滅し、まれには、伏流水のように、息絶えた

かに見えた話が思いもかけぬ時空をへて蘇ることもあっただろう。話の新旧は問わず、民話は常に今日的な意味を内在して、現在と深く関わって鼓動し、何かを人々に問いかけてきたにちがいない。今、あらためて現代民話の世界を見つめようとする本シリーズは、昔からの伝承が現代にどのような形で引き継がれているのか、あるいは近代以降の新しい制度や社会状況の中から、どのような話が生成されてきたのか、さらには、現代に語りつぐべき民話とは何か、といった問題を孕んでいて示唆深い。まず最初に各巻の構成を紹介しておく。

〔第一期〕Ⅰ「河童・天狗・神かくし」

Ⅱ「軍隊」——徴兵検査・新兵のころ・歩哨と幽霊・戦争の残酷——

Ⅲ「偽汽車・船・自動車の笑いと怪談」

Ⅳ「夢の知らせ・ぬけ出した魂」

V「死の知らせ・あの世へ行った話」

〔第二期〕Ⅰ「銃後」——思想弾圧・空襲・原爆・沖繩戦・引揚げ——

Ⅱ「学校」——笑いと怪談・学童疎開・学徒動員——

Ⅲ「ラジオ・テレビ局の笑いと怪談」

右の内容について、テーマ別に次の四つのグループに分けて見ていきたい。

○『河童・天狗・神かくし』は、早くから我国に伝えられてきた代表的な妖怪と怪異現象にまつわる話のうち、主に明治以降の聞き書きを全国的規模で収めている。ここには、河童駒引・河童婿入・天狗の木伐り・天狗と相撲など、なじみの深い話をはじめとして、これらの妖怪に関するあらゆる資料の蒐集が試みられていて、それだけでも興味がつきない。しかし本巻がこうした伝統的な妖怪譚の現代版を網羅する点に終始しているだけであれば、あえて『現代民話考』と銘打って新機軸を打ち出す意義は乏しいであろう。Ⅰ巻を読み終えた時、従来の資料集とは一味も二味もちがった印象を覚えるのは、実はそこに、著者松谷みよ子の、話に向かい合う一貫した視線を感じ

るからにはかならない。このことは本巻だけにとどまらず全巻を通して貫かれている著者の民話をみる姿勢である。たとえば「公害を知らせる河童」の話がある。福井県九頭竜川での話だ。

ある夜、村人が「川の水をかえてくれ、水がおとろしい」と訴える河童の悲しい声を聞く。不思議に思った村人が川を見に行くが、青く澄んだ九頭竜川は何の変化もない。しかし、河童は川に住むことはできないといつて立ち去る。その後、村人は河童のことは忘れていたが、やがて九頭竜川がカドミウムに汚染されていたことが判る。

(福井県和泉村 谷直右衛門)

本文の引用は長くなるので、要約で示した。こうした話は、とかく作り話的要素がつよいという理由から、従来無視されがちであったが著者はそれを見逃さなかった。いや、むしろ右のような話にこそ、現代の民話としての今日的な問題が潜んでいるとみている。「一つの事実、加うるに伝承、そして水の汚染という現代の危機をみごとからませて一つの話として創り上げた。いや語り手には、創ったなどという意識は

なく、あつた、こととして語っているのである」という発言からもわかるように、著者のこのような視点のもとに掬いあげられ読者に訴えかけている話が随処にみえる。それは「生きたものとして捉えるのでなければ、『現代民話考』をまとめる、何の意味があるのだろうか」「現代の民話とは、伝承ののつとつた話も現代に生まれた話も、ふつふつと私どもの周囲に生まれているのである」との認識によく表われている。

それにしても、かくも多数の人々が何故河童や天狗を目撃できたのであろうか。偶然、遭遇した話が積み重なった結果と言つてしまえばそれまでだが、どうもそんな単純なことではないように思う。川や沼を生活の場とする人たちや、山仕事に従事する男たちの前に、河童や天狗は本当に姿を現わしたらしい。妖怪を信じ、怪異を感じることでできる生活が、生きることと不可分であった世界が、本書のなから垣間見えてくる。湖に住む河童や、深山の天狗が、私たちの周囲から遠ざかり忘れ去られているとすれば、それはどこかで、自然に対する畏敬の念の喪失、もしくは、自然から遊

離していく過程のようにも思われる。

○次に『偽汽車・船・自動車』『学校』『ラジオ・テレビ局の笑い』と怪談』を一つのグループに括ってみる。おもに近代化が進行するなかで登場してきた、学校制度や汽車・自動車、あるいは現代の情報メディアにまつわる怪談と笑いを扱っている。

偽汽車の話に逸早く関心を寄せたのは柳田国男であった。大正七年の「狸とデモノロジャー」の一文のなかで、貉が汽車に化ける話に注目している。つづいて、大正十五年には佐々木喜善が「偽汽車」(『東奥異聞』所収)について発表し、将来まとまった話型として定着するであろう可能性を予測している。二人の先学の着眼点の鋭さを物語っているが、ところが、その後「偽汽車」の話は、散発的な報告がなされた程度で、まとまった調査・研究は低迷状態にあった。近年、宮田登が「世間話の深層」(『昔話伝説研究』七号)において、茨城県古河市の事例を材料に分析を加え、こうした分野への関心を呼び起こした。宮田は、地域社会の自然を象徴する狸や貉が、鉄道の開通に代表される近代化・都市化とい

う文化現象に対抗しながらも、結果的にその地を追われる破目になったという、自然を侵蝕する文化の観点から考察している。

宮田のこの考えを補強する事例は本書の中にも散見しており、全国的な視野から比較検討できる足掛かりが得られたといえる。

「偽汽車」につづけて「船の怪談」を読むと、二つの話の影響関係がうかがえて面白い。幽霊船の一種に、海上で突如前方からわが船をめがけてくる一艘の船に出合う話がある。この時、ひるまずにまっすぐつき進むと壁のように立ちふさがっていたはずの船が姿を消してしまふという。偽汽車の話とほぼ同一の構造だが、多分、歴史的には偽汽車の方が幽霊船の影響をうけながら明治期に誕生したのであろう。『現代民話考』を読むと、まったく新しい型の話というのは、そう簡単に出来るものでないことがわかる。伝統的な話を素材にしなから、現代風にアレンジしたものが目につく。たとえば、よく知られた「タクシーの怪談」にしても例外ではない。深夜、車を呼びとめる女性を乗せたところ、途中で姿を消してしまつたとか、座席がべっとり濡れてい

たという話は、毎年夏場をむかえる頃になると決つて噂にのぼる。これとて、タクシー以前は人力車が主役であり、さらにその前は駕籠に乗つてあらわれたという。乗物を媒介にして不思議な現象が語られるのは、樋口淳が指摘したように、『図書新聞』一九八六・一・一八)、第一に、乗物と他界との関わりの深さ。魂の乗物としての精霊船や、共同体の境界領域(他界)を走りぬける汽車や自動車の存在。第二に、誰が乗るかかわからない未知との遭遇の機会を孕んでいること。第三に、不慮の事故とそこから派生する話。などの要因が挙げられよう。タクシーの怪談には、旧來の話のパターンや背後にある民間信仰を引きつりながら、そこに新しい状況を取り込んで現代に甦ろうとする姿が鮮明に読みとれる。

ここ数年来、世間話に対する関心が高まりつつあるが、しかし、多くは村落共同体の中で語り継がれてきた狐狸の話や、火の玉、大力譚など定型を具えた奇事異聞に執着する傾向がみられる。過日、ある研究発表会で口承文芸の調査報告を聞く機会があったが、世間話については、一般的な話ば

かりでとりたてて報告すべきものはないという簡単な内容であった。聞きながら、果してそうだろうか、という疑問が残つた。どうも調査者自身が、今まで漠然と世間話と呼ばれてきた話に囚われすぎていて、そこから洩れた話の存在に目が届いていないのではないかと感じたからである。新たな話が無いのではなくて、新たな話を発掘する視点の欠如と云うべきかもしれない。

「学校の笑い」と怪談」は、まさに、著者の現代民話を捉える新たな視点から本格的に掘り起こされた領域といえるだろう。

「学校のいわれ」の項には、校舎が墓地や処刑場の跡に建っているため、その祟りでさまざまな怪異現象が発生し、事故が絶えない例がいくつもあげられている。多数の児童・生徒が生活する学校は、怪我や事故の起こりやすい現場でもあるわけだが、それをこうした因果関係から説明している。広い土地を要する学校の敷地は、しばしば一般の住宅地としては地域住民から敬遠されがちな土地を利用して建てられているのも事実で、その意味で、怪異談が発生しやすい素地をもっている。しかし、それはあ

くまで一つの要因であって、学校建設以前の状態が原因でその後の事故・事件が発生している訳ではない。むしろ事実はその反対で、校内で発生した事故や不可解な出来事を説明するにあたって後から右のような説明がほどこされるのであろう。学校の出来事を解釈する際の説明回路として、靈魂觀念を下敷にした種々の因縁話が現実には学校現場で機能している点は興味深い。

体育館、美術室、音楽室、理科室、便所といった、いわば学校における非日常的空間に、子供たちの怪談が集中している面にも留意する必要がある。なかでも、便所はその代表格で、あかずの便所、赤い紙青い紙、赤いはんてん、三番目の花子さんなど、実に多彩な話が収録されている。ムラサキババアのように限られた地域にのみ出没する妖怪もいれば、一方で、赤い紙青い紙などは北は山形県から南は沖縄県に及ぶ広い分布を示している。類型性をもって広く分布する話については、ラジオ・テレビ・雑誌などの情報メディアの関与をぬぎに考えつらいが、情報源と話の広がりについては今後明らかにすべき課題であらう。

それにしても、近代化された水洗便所に数々の怪談がとりついている事実は注意しやすい。便所空間には、異界と交錯する特別の空間としての觀念が働いていると予想できる。近代的制度の申し子である学校は、自らのうちに前近代的な要素を色濃く宿していると言つてよい。子供たちの伝承するこれらの話は、学校の公的な場ではめつたに顔を見せない。もつぱら私的な生活の場で話題になることが多いだけに「話し場」や「伝播の状況」「情報のルート」といった問題にメスを入れる必要を感じるが、この点については本書からは部分的にしかがうかがうことができない。本書の刊行を契機にして、これらの問題を個別的に追究することによって、学校の世間話の全体像が浮かび上がってくるだろう。

「あだな」の話のほとんどは、子供たちが教師につけたものだが、命名の動機が実にユニークであり、鋭い観察力と的確な表現力からなるイメージの世界は、子供文化をはかる尺度でさえある。また、その効用もなかなかのもので、たとえば、戦争中軍事教練のきびしいカバというあだなの教師

に対して「海行かば」の歌をうたう時には「海ゆかば、水漬くかばね」と、その部分だけを大声を張りあげたというエピソードなどは、教師に対する精神的な反発のはけ口であった。

『ラジオ・テレビ局の笑いと怪談』に次のような笑話が載っている。ナマ放送の時代劇「鳴門秘帖」の本番中、隠密役が斬られ密書を姫君に渡すシーンで、あやまって懐からギャラ袋を出したというのである。

「カメラがその書状を大寫して『あっ』と驚いた。なんと手には『原保美殿、出演料×円』というギャラ袋がしつかり握られていたからである」。テレビ局の有名な裏話ののだが、実はテレビディレクターの鴨下信一が当時たまたまその場に居合わせたそうで、本書を読んだあとで「原さんが寄つてゆく。そのときフトコロからギャラの袋がひよいとのぞいてしまった。××原保美殿という字が見えたというのが本当のところである」と述べている。『文芸春秋』12、一九八七年。事実がそのままでは伝わらず、話に尾ひれをつけておもしろ可笑しく今も語られているのである。

ほかに、NHKのラジオアナウンサーが、放送時間に遅れそうになったため、風呂場から一糸まとわぬ姿でかけつけ「裸で失礼します」と言ったという話がある。ところが、この話がTBSでは「寝巻のまま

で失礼します」、山陽放送では「こんな格好で失礼を致します」などとバラエティに富む形で広がりを見せている。著者は「NHK、民放を問わず、アナウンサーにとつて実感のある話であり、普遍的な共感を呼ぶ」ためと指摘している。日常のちよつとした出来事のなかにも、話の生まれてくるきっかけと、成長の過程、それに共感を覚えて伝える共通の意識といった要因を追跡することが可能であることを教えている。

「ラジオ・テレビ局は、一般の人たちにとつては異郷である。異郷であるだけにお、一つの地域社会ができてしまうのではなからうか。NHK村、TBS村、NET村、というように。そして異郷に生きることの恍惚と、秒読みに生きる瞬間の激しい緊張と昂奮という共通の地盤があり、番組を制作し放映しなくてはならないという目的のために、共同作業が要求される」と、

笑いが生まれ、語りつがれる現場の属性を、放送局の異郷的性格と特殊な作業内容の共通性から説いている。

○『夢の知らせ・火の玉・ぬけ出した魂』
『あの世へ行った話・死の話・生まれかわり』では、おもに人の魂の活動にかかわる話を集めている。死の予兆、あの世のこゝと、生まれかわり、などが中心テーマだが、とりわけ、事故や死の前兆現象である、火の玉、夢の知らせ、カラス鳴き、といった予兆譚が主要な部分を占める。さきごろ私はVに取められているカラス鳴きの事例をもとに、予兆譚の構造を①異常の発生②危機意識の高まり③予兆の感知④判断⑤危機改善の努力⑥結果（危機の増大または回避）という関係性の連鎖に求めた（『民話の手帖』一九八七・秋。IVVの両巻を覗くとさまざまな予兆現象が各地で取沙汰されている様子が理解できる。つづいて予兆は、偶然見聞きするかのよう思われており、またそうした偶然性が人智では解し難い何かの存在を暗示する。ところが、一連の予兆譚を注意深く読んでいくと、実は予兆を感知する以前に、すでに何らかの異常な事

態が進行している場合が少なからず目にとまる。たとえば、知人が危篤状態に陥る、身内の者の出征、父の出漁中に台風が発生、といった具合に、日常生活の安定と秩序をおびやかすような事態に直面した時、そこから生じる不安や危機意識の高まりが予兆の感知と密接に結びついている。予兆は偶然に感知するというよりも、ある状況のもので予兆はつくられると言つてよいであろう。著者は、現在の予兆譚が数百年前の話と重なる点に強い興味を示しているが、よく似た話が時代を超えて伝えられる背景には、死（異常）に対する人々の抜きさしならぬ意識が、死の予兆にかかわる共通の形態をもつ話に昇華して連鎖と受けつがれていることの証左であろう。

○『軍隊』『銃後』『子供たちの銃後』（二期―IIの一部）は、戦争という巨大な非日常的事件の全体像を、民衆の証言を通して浮かび上がらせようとしたものである。戦争に駆り出された兵士たちの、呻きにも似た数々の恐怖・怒り・絶望などの生々しい声には理屈ぬきに戦慄が走る。それはまた、年寄や女性・子供など銃後を支えた立

場の者にも例外ではなかった。ここに収録された体験の集積は、戦争をくぐりぬけてきた人々の魂の叫びであり、暗黙のうちに形成された庶民の戦争観である。と同時に「体験の範囲を越えてでも戦争を語り伝えなくてはならない」という著者の切実な願いでもあろう。膨大な証言は、従来ほとんど書かれなかった軍隊生活の暗部や、戦時下の民衆の生活状態が立体的に描かれていて、戦争の空白部分にせまっている。しかし、その一方で、ここに取りあげられた話を民話と呼んでよいのだろうか、と疑問が湧くのも自然な見方であろう。確かに、戦争体験から生まれた話が、類型性をそなえて語りつがれている例も散見するが、しかしそれはごく一部であって、他のほとんどは個人の体験談によつて占められている。

もちろん、著者がこれらの問題に無関心であるはずはなく、周知の上であえてこのテーマに取り組んだにちがいない。「話のすべてが民話なのであろうかと問うむきもあると思う。軍隊を民話としてよいのだろうか、と、問うむきもあるであろう。それらの諸問題を内包しながらの、一冊なのだった

た」との発言からもそれは確認できる。さらに、つづけて「およそ事実と民話の間には、しかとした境界はなく(中略)ある人が語れば味もそつけない事実譚が、ある人の語りを通せばみごとに民話としての座を占めるのではないかと思う」とも述べている。

昨夏、著者は「鳥になった話」という論考を発表した(『ユリイカ』一九八六・七)。その中で、飢えの苦しみから弟の腹を包丁で割いた兄が、後悔のあまりオートハラキッタと鳴く時鳥になったという小鳥前生譚を論じつつ、鳩の鳴声を聞くとき今でも「空襲警報、空襲警報」と聞こえるという一話者の報告をそこに重ね合せている。「飢饉で死んだ父を思つて『てて粉食へっ』と鳴いて鳥になった話と同じように、「くうしゅうけいほう、くうしゅうけいほう」と鳴く鳩が生まれたとて、すこしもおかしいことはないのだった。いや生まれてこそ当然ではないだろうか」と、民話に対する信念のようなものを投げかけている。苦しい生活の葛藤からこみあげてくる、たまらない思いが、死者の魂が鳥になるという日本人の心

情と共鳴して民話に結実するのではないか、という著者の民話観が読み取れる。それは、『現代民話考』全巻のうちに脈打っているといつてもよい。「軍隊にあっては日常茶飯事であつたことも、語りによる昇華作用を受けたとき民話としてその場を占める筈であり、多くの話のなから読み手を目をもつて民話の結晶を、またあと一息で結晶するであろう話を探し出す楽しみを味わっていたいただきたい」との発言に、『軍隊』『銃後』に民話の眼を注いだ著者の見解が示されているといえよう。

以上、気のついた点を述べてきたが、言うまでもなく、「現代民話」の世界は、この一期・二期八巻の内容で終るものではない。現代に眼を凝らし、意識を研ぎ澄ませば、魅力的な領域はさらに広がっていくであろう。また、今日の蓄積は、量的にみてもそれは氷山の一角にすぎない。現代民話の研究は、まさに緒についたところである。

(立風書房刊 一八〇〇円〜二〇〇〇円)
(つねみつ・とおる/東久留米市立下里中学校)